

芥川だより

発行日***2017年2月1日 e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集発行人 下村嘉明

発行所

☆ 着物から服へ

着物から服を仕立てます

高槻市芥川町2 -1 4 -3

TEL 072 - 681 - 8870



***** 一部100円です *****

ボタン雪



夕暮れ時、囲炉裏端にいと母が畑で白菜を取ってきて「ヨシよ、雪が降ってきたわ、今晚は積もるかもしれん」と頬かむりした手ぬぐいにたまった雪を払いながら言う。「かなんなあ、学校へ行けるやろか」「そら大丈夫や、村の人が朝はやくから雪かきしてやから」。晩飯を食い便所に行くために外へ出る。夕闇にぽたぽたと雪が降り続いている。冷え込みがひどくなってきているので早く用をすませ家に入った。

土間のかまどへ行き火がついた炭を三かけらほどつまんで火入れにいれ灰をかぶせ落とさないように持って部屋の陶器のあんかに差し込み布団をかけておく。

川むこうの小学校までは、かなり遠い山道を歩かなければならない。いくつかの谷を越え、揺れて滑りやすい大きな木のつり橋も歩いて通らなければ学校にはたどり着けない。あす履いていく長靴が気にかかったが、とにかく早く寝ることにした。

翌朝起きてみると昨夜からの雪がやむことなく降り続いていた。「こんなんで行けるやろか」と思いながら急いで支度をする。心配した長靴もぶかぶかだが仕方がない。家から外にでると何もかもが白く空さえ雪粒でうまって真っ白であった。見通しも悪くどこが道なのかわからない。用心しながら道らしきところを歩くが道をそれてズボットはまる。村の中ほどの集合場所に行くと何人かは来ていた。みんなが来るのを待って一緒に歩き出した。村はずれになると雪かきされていないのでどこを歩けばいいのか分らないようになる。

すべって転んだりして雪まみれになって教室についた。始業時間はとくに過ぎていたが、授業は始まっていなかった。まだ来てない子が多くいたからである。私の村よりもっと山奥は雪も深く登校するのが大変だったのである。みぞれ交じりに降りだすボタン雪は、初めはポタポタ落ちてきてすぐにとけるが気温が下がってくるとふあふあとうように落ちてくる。積もった雪は重たく雪かきが大変なボタン雪であった。裏日本から表日本に住み着いて久しいが、たまにふる雪を見ると昔の田舎の冬を懐かしく思い出す。

死をめぐるあれやこれ(29)

石川 吾郎

冬の狩り

幸いにして、たまたま私は植物園の近くに住まっている。それをいいことに時間があればここを絶好の散歩の場にして、四季それぞれの花々の写真撮影することを趣味にしていた。

この厳冬期、さすがの植物園も色彩に乏しくなるのだが、それでも早咲きの梅や侘び助椿がもう咲き始めている。早春の野草、可憐なバイカオウレンも咲き出した。

そんな雪の日曜の朝、園内の雑木林の細道を歩いていると、視界の隅をさつと横切るものがある。不審に思い、その方向へ歩いて見てみると、雪の上にキジバトの羽根が散乱している。

そうだ、小型の猛禽が狩りをしたのだった。視野の隅をよぎったのはキジバトを捕らえた猛禽の異形であつただろう。

この一見平和な植物園の雪景色にも、死が潜んでいることを思い知った光景だ。

* *

さて人間界に戻ると、日本の社会と国民を、猛禽の餌食に差し出すような政府とマスコミが支配する姿があること気づく。小紙がこの事実を警鐘を鳴らす役割をほんの少しでも果たすことを願う・・・。

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム	石川吾郎	1
マスコミが伝えないニュースの側面	伊藤明	2
素老人☆よもだ帳	坂本一光	4
哲学屋のつぶやき	祖蔵哲	6
大峰奥駈道	梵店主	8
おつちよこチョイぼけ	A O	9
孫ウオツチング	福田圭	10
大人の今昔物語	石川吾郎	11
B級サラリーマン渡世譚	明石幸次郎	12
オクラの山たより	困了生	13
我がおくの細道の旅	成瀬和之	15
米国紀行	河原林成行	16
ピクトグラムあれこれ	大江雄鬼	18
編集後記	嘉	19
女90年の軌跡	眞粧	20
俳句	土田裕 影山武司	20

みんなで知ろう日本の危機 (18)

マスコミが伝えないニュースの側面

伊藤 明

山本太郎議員の国会質問スピーチ！

◆はじめにスピーチは次の項から

この一ヶ月間で最大のニュースは、やはり米国のトランプ大統領が就任したことでしょう。これは世界中に様々な影響を与えています。就任演説では「米国第一」を強調し「保護主義が繁栄をもたらす」と、自由貿易主義（グローバルイズム）に明確に反対する姿勢を示しました。

そして大統領就任直後から、大統領選挙の公約を次々に実行する姿勢を示しています。TPPからの永久撤退、北米自由貿易協定（NAFTA）の見直し、メキシコとの国境に壁を建設すること、難民・移民の規制など。米国内の雇用創出をはかるために、様々な方策を打ち出しています。そのやり方は独断的で偏見に満ちていますが、この「保護主義」は、これまでのグローバルイズム主導のオバマ政権の「自由貿易により貧困化が進行してしまつた米国民の経済状態を向上させる対抗策だ、ということ」を認識しておく必要があります。

日本のマスコミでは、この「保護主義」をあたかも目の敵のような悪者扱いをする報道が大半を占めています（日本を含めた）各国国民の大多数を貧困に陥れた張本人が、この「保護主義」と真逆の「自由貿易・グローバルイズム」政策に他ならないことは、今や明らかになっています。「一定の保護」、国内産業や各種制度の保護・規制が、国民の生命と財産を守る上で、正当かつ重要な防衛であり、一つの国がこれを民主的方法によって決定する自由を保持することの重要性を再認識する必要がある（TPPは日本から各種の保護・規制を撤廃させ、自主決定の権利を放棄させるものでした）。マスコミが「自由貿易」が一番で、これがなく

なると日本が困るといった情報を垂れ流すのは、そのスポンサーの大企業に都合のいいのが、まさに「自由貿易」だからと言えます。

一方で、トランプ氏は日本を含めた諸外国に対しては極めて攻撃的で厳しい態度で臨んできています。言ってみれば米国の豪腕ビジネスマンが「日本から稼げるだけ稼ぐ交渉」を、日本政府にしてくるのです。それに対してわが国の安倍政権は「自由貿易の必要」と、TPPの必要性をトランプ氏に説得する「ことに固執する」というのはずれたことを言い続けています。さらに悪いことに「米国第一」とするトランプ氏に対して安倍政権は「日米同盟第一」の姿勢をとり続けています。この姿勢で、老獪なやり手のトランプ氏と会談をもつというのです。軍事情のさらなる支出を強要され、日本国内の諸制度を米国のグローバル企業に差し出すような各種の規制撤廃を約束させられることが容易に予想され、危惧されま（例を一つ挙げると、水道などといった重要なインフラを米国企業の参入ができるように規制撤廃させられるなど。米

抗しなければならぬはずですが、安倍政権はそんなことは言いません。なぜなら彼らは「米日グローバル企業第一」の政府であり、日本国の利益や九九%の日本国民の利益は眼中になく、国民を搾り取る存在としてのみ認識しているからです。

「云々」を「でんでん」と言い、「踏襲」を「ふしゅう」、「未曾有」を「みぞうゆ」と言ったりする、自国語さえおぼつかない総理と財務の二人の大臣が、このような「日米同盟第一」の考え方をもって日本のために、トランプ大統領とまともな交渉ができるとは思えられません。会談では、国民には知らせられないようなトランプの理不尽な要求を無力に受け入れるという、国民に発表できない密約を結んでしまう可能性が考えられます。

在日米軍の軍事費用についてここで触れておくと、「日米地位協定」では米軍経費は米国が払うと規定されています（このことは日本の国民はほとんど知られていません）。ところが「思いやり予算」で日本政府は、七千億円以上を支出しているのが現状なのです。これをさらに増額するように迫られることは必至です。たとえば国公立大学を無償化するのは五千億円、義務教育の給食の無償化は五千億円あればできるということです。軍事力を強化して米軍への資金を出すということは、その裏で国民に必要な予算が削られるという二重の意味していることを知らねば

ならなりません。これをどのように考えるかを、国民的に議論する必要があるのです。

また今国会は、「テロ等準備罪」と名を変えて、犯罪の計画段階で処罰する「共謀罪」のを新設する法案を安倍政権が国会提出をするとしていますので、これに反対の声を上げて行かなければなりません。これは戦前日本の「治安維持法」に相当するものになり、思想弾圧を許すことになってしまうものなのです。

このようにも悪政を続け、我が国の国益を損ない続ける無能な安倍政権を、一刻も早く退陣させる必要があります。

◆山本太郎議員代表質問

以下に、本年一月二五日参議院本会議における山本太郎議員の代表質問を、書き起こします。非常に型破りですが、国民の心に響く言葉で語られたスピーチです。また、国民にとって非常に重要な内容が含まれる素晴らしいものです。ぜひこれは読者のみなさんにじっくり読んで頂きたいと思います。さらに、このスピーチを**国会の議事録から抹消しようという動きがある**、ということも伝えられていますので、ここに記録をしていくことは、重要な意味があると考えました。できれば他の方々にも広めていただけたら幸いです。

以下、**山本太郎議員の参議院代表質問(全文)**

自由党共同代表の山本太郎です。先日安倍総理が施政方針演説で、「ただ批判で明け暮れても何もうまれない」とおっしゃりましたので、今日は批判ではなく、政権の今までのお仕事を肯定的にふりかえり、ほめ殺しぎみに希望の会・自由社民を代表して質問します。よろしくお願いします。

政治の使命はこの国に生きる人々の生命財産を守ること、そう考えます。安倍総理は、誰のための政治を行っていらっしゃいますか。安倍総理はきつちりとお仕事をされておられます。庶民を犠牲にして大企業を儲けさせる、その活躍ぶり、歴代の総理大臣を見てもナンバーワンです。庶民から搾り取った税金で、庶民への分配は最低限に抑え、まっさきに手当をするのは、選挙や権力基盤作りでお世話になった経団連など資本家、高額の納税者へのご恩返し、とことんおいしい減税、優遇税制の提供、一方で派遣法を改悪し、働く人々をコストとして切り捨てやすくするルール改正などを取りそろえる、おかげで上場企業はあのバブルのときより儲かり、過去最高益、一方で中小零細企業の解散倒産は過去最高、見ているのは大口の支持者のみ、まさに大企業ファースト、これぞ額に汗を流す政治家の鑑^{かたみ}ではないでしょうか。

子どもの貧困問題を人々の善意・基金で解決しようというウルトラCは、安倍総理が薄情で指導者の器ではない、ので

はなく、総理はただ興味がないだけなんです。今まで国会やメディアで取りあげられてきた、厚労省の「国民生活基礎調査」ではなく、ちがうデータを持ち出して総理は子どもの貧困率が低下したと演説されました。持ち出したのは総務省の「全国消費実態調査」。この調査は非常に面倒な作業を対象者に求めるもので、お金と時間の余裕がある人しかなかなか対応することができず、低所得者層の実態をしつかり反映しづらい傾向があると言われています。厚労省の「国民生活基礎調査」では、子どもの貧困率は十六・三％。今年最新のものが発表される予定ですが、この調査でアベノミクス効果により、子どもの貧困率がどれくらい下がるのか、総理の予想値を聞かせて頂くとともに、今年子どもものの貧困改善の数値目標をお答えください。

ここ数年奨学金問題、非常に大きくなっています。OECDなどの先進国グループの中で、教育に最もカネを出さない、ドケチ国家の第二位が日本なんです。個人消費を引き上げる意味でも、少子化問題を改善する意味でも、奨学金という名のサラ金地獄から対象者を救い出す必要があるのは言うまでもありません。新たな奨学金国債を発行して借り換える、マイナス金利に会わせて、過去の有利奨学金をすべて無利子に転換する、などはもちろんやりません。なぜ国がサラ金のようなシステムで若い人々を苦しめるのか。奨学金の利息収入は年間三九〇億円

ほど、奨学金の延滞金収入は年間四〇億円ほど、これらで金融機関を潤わし、取り立てを行う債権回収会社に対しても手堅い仕事を提供する。若い者たちの未来には投資をしない、企業のためだ、若いうちの苦労は買ってでもしろ、安倍総理の親心ではありませんか。

安倍政権になってからは、正規の雇用は三六万人減って、非正規は一六七万人も増えています。ですが安倍総理は以前、正規の雇用が増えたとおっしゃっていました。以前です。確かに二〇一五年労働力調査を見ると、正規では前年比では二六万人増えています。まさにこれこそがアベノミクス効果ではないですか。

この正社員二六万人のうち、二五万人は介護・福祉職。介護・福祉職のうち福祉施設介護員は、全産業平均より月々十一万円給料が安いんです。もちろん安倍総理はここにも改革をすすめます。月額たった一万円ほど上げるそうです。現在労働認定で一番多いのが心の病、その中で労災申請、過労自殺のトップが介護・福祉職。現場の悲鳴は聞こえないふり、細かい中身は見ないでいただきたい。表側の数字だけで評価するんです。これこそがアベノミクスの神髄ではありませんか。安倍晋三閣下は、行政府の長であるばかりか、立法府の長でもあると、ご本人がご宣言されました。司法の長になられるのも時間の問題ではないでしょうか。そのためにも現行憲法など守っていただけませんし、守りもしません。当然です。

不都合な真実・事実を声高に叫ぶ人物はじやまず。オリンピックに向けて、火事場泥棒的に治安立法を成立させます。安倍総理、オリンピックを成功させるには共謀罪が必要との主旨の発言がありました。共謀罪を「テロ等準備罪」と名前を変えるようですが、「テロ等準備罪」の「等」とはどういう意味ですか。テロ以外にも適用される余地を残す理由を教えてください。世界一安全な東京とアピールしておきながら、たった数週間の体育祭を開催するのに、国民を監視し密告制度で相互監視までさせ、相談しただけでアウトという、権力が思想信条の領域にまで足を踏み入るとんでもない法律が必要な理由は何なのでしょう。

東電原発事故による放射能汚染問題について総理にお聞きます。ブエノスアイレスでのご発言。汚染水は〇・三平方キロメートルの港湾内でブロックされている、これにお間違いはないでしょうか。海では潮の満ち引きがあり、港湾内の水がブロックされること自体がありません。八日間で九九%、港湾外と港湾内の水は入れ替わります。大量の海水でゆっくりと希釈された結果、港湾外に出た汚染水の数値は低く見えるものの、垂れ流される汚染の総量には変わりはありません。去年初め静岡県沼津市の漁港で水揚げされたアオザメから基準値の七倍ものセシウムが検出されました。汚染水の影響は明らかに海洋生物にもみられますが、みなさん細かいことは気にしないでいた

だきたい。総理がブロックされているとおっしゃっていらつしやるんですから、それを信じようじゃありませんか。お訊きします。最終的に東電原発事故の収束費用はトータルでいくらかかるとお考えになりますか？将来もう一カ所で原発の過酷事故が起きた場合、国の経済破綻は免れないと考えますがいかがでしょうか？日本は火山国であり、地震大国です。それでも原発再稼働を進めて大丈夫ですか。大丈夫と言い切れますか、お答え下さい。

福島東電原発の収束は、その方法もなく、現在ではほぼ不可能。その費用も今後桁違いの額になることは容易に想像できます。事故原発の原因も究明しない、安全基準でたため、避難基準適当、原発がなくても電力は余っています。原発は再稼働します。海外に売りつけるために再稼働します。プルトリウムを持ち続けるために再稼働します。三菱、東芝、日立、鹿島建設、大林、大成、竹中清水、IHI、富士電機、三井住友銀行、三菱東京UFJなどなど、原発に関係する企業のみならず、安心して下さい。安倍政権は脱原発など絶対にやりません。安倍政権は税金と電気料金を湯水のように使える発電方法はあきらめません。首都圏直下型地震、三十年以内にマグニチュード七で発生する確率約七〇%、東南海地震、南海地震、三十年以内マグニチュード八から九で発生する確率、約六〇から七〇%。日本列島、北から南まで五

〇の活火山が二四時間体制で監視されていますが、火山噴火予知連絡会がこうおっしゃっています。「すべての噴火が前もって分かるわけではない。我々の予知レベルはそんなものだ」とコメント。火山予測のプロでもほぼ予測不可能だそうです。自動車事故、医療事故、過失であれば当然処罰されます。しかし原発事故では未だ過失で処罰された者は一人もいません。すべては「想定外」という魔法の言葉で逃げるおつもりでしょう。次の事故が起きたとしても、安倍総理ならもつと上手に誤魔化せます。みなさん、安倍総理を信じてこのバスに乗り込みましょう。次の停車駅は地獄の一丁目一番地です。

今回無理をして批判は避けようと思いましたが、どう考えても無理です。総理、あなたがこの国の総理でいるかぎりこの国の未来は持ちません。最後にお伺いします。総理、いつ総理の座から降りて頂けるのでしょうか、教えて下さい。以上を持ちまして私の代表質問を終わります。

(以上)

なお共産党志位委員長・小池書記局長の代表質問も鋭く、より包括的な内容です。これは「しんぶん赤旗」の紙面、ないし「しんぶん赤旗」のホームページから読むことができます（検索窓から検索する）ので、これもぜひお読みになることをお勧めします。

素老人☆よもだ帳 (35)

坂本 一光

◆和とは何か、なぜ尊いか

正月も過ぎて少しばかりホツとした頃、和とは何か、なぜ尊いか。そんなことに思いを巡らせた。正月が過ぎてなぜホツとしたか。そこにはわが家の事情がある。年末から正月明けまで保育所が閉所となる間、近くに住む娘夫婦が仕事を休めない関係で孫たちを預からなければならず、日頃以上に爺婆の家が保育所化するからある。それはさて置き、和といっても、六〇四年に聖徳太子が作ったという『七条の憲法』の第一に掲げられた『一、以和爲貴、…』のことではない。日本も世界も良い一年になるとは思えない殺伐とした世界で、それでも希望を持つて未来を展望する視点の一つに和があるのである。和とは何か、と漠然と思ったのである。その和とは何か、考えてみようと思った。しかし、考えても釈然としない。互いに異なる別のものが、違っているにも関わらず、違いを認め合い仲良くすればすべて丸く収まる。それが和なのか。いやそんなことではないだろう。そうではなくて、和とは、何かと何かとの関係性であり、つながりのないところに和はないのではないか。しかしそうであれば、和をもつてつながるとはどういう関係性か。思いは乱れるばかりで、和とは何かの問いかけは棘のように私に刺さったままであつ

た。

和の意味を解く鍵を見つけたと思ったのは、ふとした拍子に、昔読んだことがある一つの詩を思い出したときである。そして、ああ、こういうことであつたか、と言葉がもつ力とそれを紡ぐ詩人の志の高さに胸を打たれた。『生命は』という吉野弘の詩である(『吉野弘全詩集』、三六四頁、青土社、一九九四年)。紹介しよう。

生命は

吉野 弘

生命は

自分自身だけでは完結できないように
つくられているらしい

花も

めしべとおしべが揃っているだけでは

不十分で

虫や風が訪れて

めしべとおしべを仲立ちする

生命は

その中に欠如を抱き

それを他者から満たしてもらうのだ

世界は多分

他者の総和

しかし

互いに

欠如を満たすなどとは

知りもせず

知らされもせず

ばらまかれてゐる者同士

無関心でいられる間柄

ときに

うとましく思うことさえも

許されている間柄

そのように

世界がゆるやかに構成されているのはなぜ?

花が咲いている

すぐ近くまで

蛇の姿をした他者が

光をまつて飛んできている

私も あるとき

誰かのための蛇だつたらう

あなたも あるとき

私のための風だつたかもしれない

詩人の言葉にある通り、『世界は多分

他者の総和』である。そしてそれは、生

命に限ったことではない。世界を構成す

る要素はみな『その中に欠如を抱きそれ

を他者から満たしてもらふ』ものとして

在る。さらに言えば、『他者の総和』であ

る世界は『緩やかに構成されている』が、

それは世界がもともと一つに和した存在

であることを意味する。詩を勝手に拡大

解釈するのは無礼な話かもしれぬが、世

界の存在の豊かさと尊さ、その美しさに

思いを致してみよう、と詩人は呼びかけ

ているようにみえる。あれはいつ見たか、

『この世は美しい』と主人公が語るテレ

ビドラマがあつた。

もちろん、世界は生命あるものだけで

構成されているのではない。生命あるも

のも、生命なきものも、地球に存在する

すべての物質系は互いに密接につながっ

ている。そのつながりがあるからこそ、

ある一つの物質系は他の物質系と絶えず、

系を構成する物質を、したがってエネル

ギーを交換することができる。物質はそ

の内に化学エネルギーをもち、物質の種

類が変化する化学反応によつてエネルギ

ーを吸収または解放する。物質それ自体

の変化を伴わない、物質の物理的状態の

変化の場合を含め、すべての物質系はつ

ながり、生きて運動している。そう考え

れば、それが何であれ、この世界に存在

すること、そこに在ることには、それだ

けで深い意味があるだろう。

たとえば、今朝、私が飲んだ水は、何

年か前には海にあつた水かもしれない。

海に行く前の水は、奥深い森の木々が大

気中に蒸散した水蒸気であつたかもしれ

ない。私の身体をつくる炭素原子は、何

年か前には大気中の二酸化炭素の中にあ

つたのかもしれない。その二酸化炭素を

植物が光合成で利用し、それを私が食物

にしたのかもしれないのである。自然科

学が言うところの食物連鎖や地球におけ

る物質循環は、存在するものすべてはつ

ながっていることを教える。死んだら土

に還るとは、命がまた始まりの物質に戻

ことを教える。和とは、万物はすべてつ
ながり、存在の輪をなしていることを言
うのだ、と私の思いはそこに巡り至つた。
それが何であれ、何ものも他者とのつな
がりなしには存在しえない。
互いが互いの一部であることを人間同
士のつながり、協同、連帯に当てはめ
ると、
私の中の私はあなたの中の私だから
私はつながる私たちへと
なるのかもしれない。私たちとは、そう
いう存在である。私があつて私たちがあ
る。
ついでに言えば、他者の存在の否定な
いし抹殺は、大げさな言い方かもしれぬ
が、万物の存在の輪の破壊であり、やが
て自らの存在をも揺るがすことになるだ
ろう。それは、人においても、また民族
や国家においてもそうだ、と私は思う。
他者によらず、自らの存在を自ら否定な
いし抹殺することもまた同様に、万物の
存在の輪の破壊である。
私は思う。私は世界のどこにいますか。
私は人類の一員である。私は家族の一員
である。私はあなたの友だちである、等々。
これらのことをもつと想像力豊かに考え
てみたいと思う。そのためには、自分を
愛する心をもたなければならぬだろう。
自分がいて、初めて他者が、したがって
この世界が意味をもち、かけがえのない
自己と他者の存在の一致を愛することが
できるようになるからである。自分を大

切に思わなければ、他者を大切に思うことはできない。

そのうえで、あえて天に唾すれば、民主主義社会において、言葉のもっともよい意味での評論家は、何ものをも恐れず発言し、批判し、自らの言を誠実に実行する人である。自分を愛し、世界を愛し、世界を評論し、実行する力は、世界を自らの手の中につかむ力である。その力を高めたいと思う。それは、殺伐とした世界を捨てて和に満ちた世界を取り戻す力になるであろう。

(かたちは心であり、心はかたちになる)
■大分の素老人

(追伸) ここまで書いてきて、一月二十日のアメリカ合衆国新大統領ドナルド・トランプ氏の就任演説のニュースを見た。選挙中に何度も聞いたせりふが、一語一語、念を押すように区切られながら、また繰り返されていた。
We / will / make / America / great / again!

アメリカをもう一度偉大にしよう、と言う。もう一度、再び、と言うが、いつの時代のどのアメリカが偉大なのか。アメリカ原住民を武力で弾圧し辺境に追いやった時のアメリカか。移民の国が建国を目指し、独立戦争に勝利し高らかに独立を宣言したときのアメリカか。国内を二分した南北戦争を戦い、奴隷制度を廃止した時か。第二次世界大戦に参戦しファシズム同盟国を打ち負かす勝利の推進力となった時のアメリカか。世界の資本主義国の指導者となったアメリカか。また冷戦さなかのキューバ危機を乗り越えたアメリカか。ベトナムからは逃げるように撤退し

たとはいえ、自由主義世界の憲兵・世界の警察としてベトナム戦争をはじめ核兵器以外のありとあらゆる手段を尽くして気に入らない小国を叩き続けたアメリカか。東欧諸国・ソ連邦の崩壊で冷戦が終結し、唯一の超大国になった時のアメリカか。冷戦のさなか一九七三年、チリのピノチェットは縦横無尽に暗躍しながら、二〇〇一年ニューヨークの9.11ではテロ組織アルカイダとそれをかくまったタリバンへの戦争だとアフガンを叩き、その勢いのまま、大量破壊兵器を持つテロ支援国家であると決めつけ威勢よくイラクに侵攻、フセインを打倒したアメリカか。ほとんど従属国並みの同盟国日本で、とりわけ沖縄で、植民地支配者のごとく振る舞うことができるアメリカか。

しかし、たとえアメリカが再び偉大になったとしても、万物がつながり存在の輪をなす世界を一方的に勝手に変更する権利は、いまもそうであるように、アメリカに与えられるわけではない。それはもちろん、すべての国についてそうではあるが。

アメリカは偉大であり、それゆえに外なる世界に向かってアメリカ第一主義を主張する大統領の国が、内に向かってはこれまでワシントンから見放されてきた『国民の生活が第一』の国になるだろうか。恐るべき幻想の果てに何があるか、私たちはそれを見ることになるだろう。『すべてが変わるようにみえても、実は何も変わらないと彼は信じていた』前にも紹介したボードレールの言葉が、今またよみがえる。

それにしても、私たちの国で、アベ政治の果てに彼の国の大統領のような首相がまた君臨することだけは勘弁してほしいものである。

哲学屋のつぶやき(31)

祖蔵 哲

『ポスト真実』の時代へ

ドイツ旅行記がようやく終わり、また元の哲学屋に戻る。その間に世界の情勢が大きく変わってきた。私がドイツに行っていたのは去年の七月だったが、前月六月にはその欧州ではイギリスが国民投票の結果、EUから離脱した。そして、年末には世界が更に驚愕したトランプがアメリカ大統領選挙に勝利した。激変の二〇一六年であったが事態は今でも続きますます未来の不確実さと不安は増大している。

日本では去年の年末に恒例の流行語大賞が発表された。選ばれたのは「神つている」という誰もが聞いたようなない言葉。野球の世界のことらしいが、全く日本はズレている。世界は大きく変わろうとしているのに自分だけの世界しか見ることができない閉じた社会に我々はまだいる。それを世界は「ガラパゴス的」、「つまり進化から取残されたダーウィンの発見した島の名前にちなんで呼んでいる。最近大勢の外国人旅行者がこのガラパゴス日本を見に来るようになったが、全く日本は彼らとの交流を持つような気配はない。ただ、金を落としてくれる経済的人間としての面しか見ていない。そんな

世界から孤立した日本文化が外国人にとってはかえって珍しいのであろう。決して日本が優れてからとか、尊敬されているという目で見られているのではない。それは、私がドイツ旅行記でも書いたことだ。日本には絶対的にも、相対的にも価値観がない。対立を乗り越えた上での思想を持つのではなく、対立を回避し自分の殻に閉じこもり様子を見て出てくるといった「カタツムリの」である。このような姿勢が今激変する世界にどう対応できるのかはまったく不透明、流動的、他律的である。オリンピックや万国博、カジノという全く世俗的、感覚的、利那的なものでしか未来を示せない日本はこれからどうなるのか。

さて、流行語に話を戻そう。日本が軽薄な言葉遊びに終わってしまった「今年 of the year」に対し、英国のオックスフォード出版社による「Word of the year」は「Post-truth」であった。日本の多くの新聞はこれを「ポスト真実」と訳していたが英語本文ニュアンスからは少し異なっている。意味は「世論形成において、客観的事実が、個人や個人的信念に訴えるものより影響力を持たない状況」と訳されている。「Post」というのは本来「Post-war」(戦後)などの例に見られるように「の」の後に「という意味である。そうすると「真実の後のもの」となり日本語的にはおかしくなる。ここでの「ポスト」は「重要でない」「とってかわら

うな状況になってしまふのか、哲学的に分析しよう。

何度も言っていますが哲学とは自明のことを疑うこと、概念を概念で説明すること、それにより「真理」を見出そうとするものなのです。

では「ポスト真実」の英語「truth」とは何か。これは哲学用語で（確実な根拠による「事実」「普遍的事実」とされ普通は「真理」を用います。ですから本来訳語は「ポスト真理」となるはずなのですが、先ほどのオックスフォード社の定義も「Objective Facts」客観的事実ですが、重要なのは「事実 Facts」が複数形になっている点です。「確実な」とか「普遍的」などかは「誰が見ても」とか「客観的にみて」、つまり主観的＝個人の意見感情でなくという意味でしょう。しかし哲学はこの「客観」「普遍」の存在を疑います。本当にそんなものはあるのか。

この「真理」の存在は哲学の永遠のテーマです。おおまかに分けると三つの考え方があります。まず（１）真理対応説…これは「真理」というものが「現実にある」ということを前提にそれと一致するものを「真理」とする考えです。アリストテレス↓カント↓マルクスの流れは「理性」によってその現実の「真理」をつかめるという「目標追究型」です。二番目は（２）真理整合説…これは「真理」は今この現実にあるのではなく、どこかにあるのだからそれを「理性」が合理的に

はたらき捉えていく「過程」の結果が「真理」であるという「合理的過程型」です。

プラトン↓デカルト↓ヘーゲルの流れにあります。最後の第三番は（３）結果主義説…これは前の二つとは異なり理性より「感性」を優越させます。結果が有効なもの「快」なのが「真実」とするものです。つまり、「理性」というものは「生きている人間の生命」ととって何も有益なものをもたらない、「真実」は「生」ととって有効なものしかない、という考えです。これは現在、世界を席卷する「功利主義」「自由主義」の流れです。哲学者ではニーチエー↓ジエームスです。

以上のように「真理」(truth)といっても、多様なのですから「ポスト真実(真理)」といってもどのような状態を否定するのかわかりません。つまり、今がどのような世界なのか認識できていないということになります。

さて哲学用語としての「真実(真理)」はこのように複雑、難解であるというところがわかりましたが、時事用語としての「真実」はどのようなものでしょうか。再びオックスフォード出版の記事に戻ってみますと、「真実」＝「客観的事実(Objective facts)」と書いてあります。この「事実」とは何なのでしょう。辞書によりますと「事実…ことの真実、現実にあること」とあり、またこれも哲学用語として、「時間空間的に経験された現実」とあります。さあ、またややこしく

なりましたが、少し我慢して続けましょう。つまり「事実」とは「現実」の「ある人」がある時、ある所で目の前で見た「こと」となります。しかしこの「ある人」とは誰かが問題になります。これがこれを述べている当の本人なのか、またはだれか他の人のことか。「客観的」というのは「主観的」に対応する言葉です。

「主観」を「私自身」とすれば「客観」とは「私以外の他の人」ということになりませんが、「客観的」というと「私」が「私以外の人」を通して見た「私」ということになります。少々複雑ですが、「私以外の他の人」が「私」と同じこととして思っているという「確信」のことです。ですから「客観的事実」という多くの人がそう思っているだろうという「思い込み」です。「事実」そのものは本来まったく、「個人的」な「その場、その時」の「経験」そのものです。「事実」(fact)が「真理」(truth)であるとは限りません。いやむしろ「事実」も「真理」もそれぞれ多数あり、それが一致することはまれでしかないということでしょう。私たちがこれこそ「事実」だと思ふことがたいいて間違っていることは日常で多く経験しているはずで「幽霊の正体見たり枯れ尾花」。私たちの生活の大半の経験は不確実なものであり、それでも何とか暮らせるのは「確信」があるからです。この「確信」こそが「客観的事実」と言われるものでしょうか。ということ

は「ポスト真理」といものはその「確信」が揺らいできているのかも知れません。

さて、「真理(truth)」は「事実(fact)」から演繹されてだんだんと本質がみえてきました。しかし、ここでさらにややこしいことに、この「truth」はこの「ポスト真理」のように「真実」と訳されることもあり、われわれ日本人は「真理」と「真実」の違いも考えなければなりません。

この「真実」は仏教用語から来ており、「仮ではない」「絶対の真理」「真如」とされています。つまり「絶対」＝「一つ」の「真理」であるということになるのです。そうすると「真実」は本来「一つ」であり、複数の訳である「真実」は「post truth」の日本語訳には本来当てはまらないのですが、哲学の「真理」は「ひとつ」とは限らないといっていますので本来は「真理」でいいのだろうと思いますが、ここでは「ひとつ」と限定しています。この意味で「真実」＝「真理」になります。しかしここで注目しておきたいのはこの用語が「仏教的」つまり「宗教的」語彙であることです。つまり、普遍的であるけれども非常に「個人的」でもあるということです。「宗教的真実」といつたり、「真実の恋」だと言う時には「普遍的」というより「より個人的」という意味あいで使います。

さて、話がますます複雑怪奇になってきましたのでここから整理しましょう。

「真理」「事実」「真実」この三つを「主観」側から「客観」側に、つまり「個人」側から「他者」側へ、さらに言い換えると「個別」から「普遍」へと並べると次の図になります。



「事実」を中心に考える
と左側、つまりより個人的になると「思い込み」になり、右側、なるほど「確信」に近くなりま

す。しかしこれらはどちらも本来「私」を中心におかなければならないのです。

現代はこのような「私」が不在の世界になっています。自分が自分であるという「確信」はあくま

で「私」が確保すべきです。それが、忘れられ「他の確信」がそのまま自分の「思い込み」になっています。不断に「真理」を探究すること、「真理」はあるが到達点はないということを「確信」すること、「哲学する」こと。これが「真理」であると私は思います。「ポスト真実(真理)」という「現象」は「真理とは何か」を問う「契機」であると考えます。

さて、トランプ大統領はメディアから就任式の参加者を過去最低の二十五万から六〇万人といわれて、それは嘘だ一五〇万人いたと豪語した。これに対して記者会見に立ったスパイサー報道官は、大

統領が事実と違う嘘をいつていいのかと記者団に問われたとき、こう答えた。「あなたたちは嘘だといいますが、私たちはAlternative Facts (オルタナティブ・ファクト)を示したただけだ」と言った。

「Alternative」とは「別の」「代わりの」という意味である。「代わりの事実」「別の事実」とは何か。「客観的事実」とは「別の事実」があるのか。さすがに司会者は「それは嘘ということですね」といった。

ヒトラーの言葉を書く。

「嘘を大声で、十分に時間を費やして語れば、人はそれを信じるようになる」

「大衆は小さな嘘より、大きな嘘の犠牲になりやすい」

「人々が思考しないことは、政府にとって幸いだ」

「偉大なうそつきは、偉大な魔術師だ」
「私は間違っているが、世間はもっと間違っている」



大峯奥駈道(8)

梵店主

いよいよ六甲全山縦走の時がきた。前日に熊さんらと夙川駅で待ち合わせて一晩泊めていただく玉井さん夫婦と一緒に近くの中料理屋で前夜祭をした。初対面のご夫婦であったがとても気さくな方で山の話で盛り上がりビールを幾杯も飲んだ。

翌朝、玉井さんに見送られて始発の電車に乗る。須磨浦公園駅に着くと多くの人が来ていた受付をすませ歩き出す。同行の女性は一〇〇キロマラソンもやっている人で強く階段を足早に登っていく。よっちゃんも遅れないようについていくが、すぐに息が切れてついていけない。もう先に行ってもらうしかない。

熊さんと二人でゆっくりと歩く。しかし、検問があつて制限時間に着かないと失格になるので懸命に歩かなければならない。愛宕山に行く前にこの道を一度少しだけ歩いたのだが周りの人についていけない。どんどん抜いていかれる。それでも何とか歩き続けると初めて歩くコースになった。市街地から高取山に登るルートはわかりにくいのが十四回目の熊さんがいてくれるから安心して迷わずに歩けるのだが、高取山の登りが意外ときつい。この高取山は神戸大震災の時に燃える長田の街を中継したカメラが置かれた場所だったと思い出した。

カメラを持って登るのも大変だろうなと想像しながら登るが足が重たく息が切れ休み休みでないと登れない。なんとか登り切って神社の参道を下りる。そこから市街地の曲がりくねって分かりにくい道路を歩き鴨越駅を目指す。五十六キロの四分の一が鴨越駅だ。汗まみれになって水を飲み続けていたので二本のボトルが無くなっていたので自販機で買う。

これからが正念場である。まずは菊水山である。この山が一番きつい急登と聞いているので心配であった。登り始めてえらい急な登りに足があがらない、もうここで引き返そうとかと弱音が出てくる。普通なら二十分ばかりの登りなのだが、よっちゃんには果てしない登りであった。必死に登ったと思ったらすぐに下りになった。大きく下ってまた登りになった。こんどは鍋蓋山である。この山は何も聞いていなかったのだったことはなと思っています。登りだしたが、なかなか頂上に着かない。菊水と同じようにしんどい。

もう完全に疲労困憊でもうこれ以上歩けないと思いつながら、なんとか大乗寺のチエックポイントに着いた。制限時間ぎりぎりです。失格にはならなかった。その場でボランテアの方からトマトジュースをもらって飲んで初めて煙草を吸った。

熊さんは余裕の表情である。なんか自分も熊さんの足を引っ張っているように申し訳なかった。すぐに市ヶ原を目指して急な坂道を下っていくと河原に出た。

茶店もあるキャンプ場である。この市ヶ原がちょうど全山縦走の中間地点である。東六甲山と西六甲山の分かれ目である。もし途中でリタイアするのならこの市ヶ原が三ノ宮にも近く好都合である。

熊さんが「どうする?」とよっちゃんに聞く。よっちゃんは「摩耶山を登るで」と言う。摩耶を登るということは宝塚まで行く意思があるということである。

熊さんは、後日「もう、市ヶ原で下りると思っていた」と言った。よっちゃんの姿をみてとてもじゃないがもうこれ以上は無理だとみていたのである。

ところが、よっちゃんは疲れ切っていて冷静に先の事を考える余裕がなかったのである。昼飯を食べるのも惜しいように市ヶ原から摩耶山に向かった。この縦走で最後の大きな登りである。普通の足なら二時間ほどである。よっちゃんは熊さんから足がつって漢方薬の薬を二袋もらって飲んでいて、もうこれ以上は飲めないから慎重に歩く。

次のチックポイントは最高峰の下にあつて少し余裕がある。摩耶山への登りは天狗尾根のコースである。このコースは以前に登ったことがあるが、長い尾根を歩き続かなければならない。果たして行けるだろうか。最低でも二時間半では登らないといけない。くたくたになったよっちゃんは、ザックから握り飯をひとつ出して食べながら歩いていく。熊さんは我慢強く後からついてきてくれる。

連載「おつちよこチョイばけ」(46)

——昭和女、どっこい日記——

トランプさんイジメ…の巻

このところ、テレビを付けたら、トランプさんが出てきて暑苦しいことこの上ない。大統領令だか何だか知らないが、好き放題サインしまくっている。メキシコとの間に壁を作る、と勝手に決めて、そのお金はメキシコに払わせるって、ヤクザか、あんたは?

もちろん、メキシコの大統領は即刻、「払うわけないやろ、ボケが」と予定していた対談を中止。当たり前だ。

イスラム圏からの入国制限に、「合法だ」という確信が持てない」と語った司法長官代行のイエーツさんという女性をクビにしちゃった。ありえへん。大統領になつてから、まだ一カ月経っていないのに、「正気かいな?」と思うようなことを毎日、どんどん言ったり、やらかしたりしている。

よくもまあ、こんなおつちさんを大統領にしたもんだわ。

トランプ派の講演会を学生がデモで阻止したら、「国からの補助金はなくなると思え」って。聞くけど、補助金はアンタのカネか? 大学生の親たちを含めた米国民が払った税金やろうが。なんでもトランプさんとは金持ちそうに見えても破産したり、姑息なことをしたりで、税金もろくすっぽ払ってきていないらしい。

い。仮に払っていたとしても、国のお金を自分のもんだと勘違いしているという点で、大統領、クビ!

まあ、大統領をクビになるのが早いかな、赤ら顔だし怒りっぱさうだから脳溢血とかで死ぬのが先か、わからないけど、死ぬ前に、大阪のおばはんとして言いたいことは言わせてもらおう。

まず、あの奥さん、何やのん?。実はいやらしい。「か・ね・め・あ・て」と全身に書いてあるやん。金持のおつちさんが若いキレイな女性に色目を使うのは結構、男性の本能で、その本能をカネの力にあかして満足させたいんだつたら、好きにすればいいけど、ファーストレディって言われると、「ちゃやろ」と思ってしまった。「いや、ああ見えてトランプさんとあの奥さまはラブラブで、二人は固い絆で結ばれてる。年齢差でヒトを判断しちゃういかんよ」と反論する人があるなら、聞いてみたい。「トランプさんが一文無しだったら、あの奥さん、結婚してたか?」。

一〇〇パーセントしてないわな。「トランプさんが一文無しになったら、あの奥さんは奥さんであり続けるか?」。それもないやろう。というところは…。

生涯の伴侶をカネで買うのって、どうよ?と私は思うけど、百歩譲って、買える人は買えばいいにしても、いやしくも人の上に立つ大統領なんだから、もうちょっとと相手を選んで欲しかった。モデルか高級売春婦みたいなカネ目当て

見えみえ系ではない、エレガント系はいなかったのか？ オバマさんのときは、ミシェル夫人の名前もすぐに覚えたけど、今度の人は覚える気にもなれない。「向こうも、大阪のちんけなオバハンなんか相手にしてへんデ」と言われそうだが、当たり前ではないか。相手にされたら、訴訟問題だ。だれが高級売春婦やねん！証拠はあんのんか？と人権侵害で訴えられる。「証拠はバロン（息子）君」なんちゃって（無垢な子供を大人の話に巻き込んだらアカン）。

トランプさんに比べて、世界各国のリーダーたちのカッコいいこと。まず、フランスのオランド大統領。国内で支持率が落ちていて、再選は目指さないと発表するなど落ち目だそうだけど、でもトランプさんの発言に「お前の意見はいらん！」と速攻、反論していたもんね。パチパチパチ（拍手）！

もつとカッコよかったのが、カナダのトルドー首相だ。「迫害やテロ、戦争から逃れてきた皆さん、カナダ人は信仰にかかわらず、あなた方を歓迎します」だって。思わず、涙した。大阪のおばはんとしては「やるねえ、にいちちゃん（トルドーさんは若い、しかも男前）。どういうことを言えば人気が上がるか、よう知ってるやん」というナナメの見方をすべきだが、ここは単純に大拍手したい。

「多様性はカナダの強みです」ともトルドーさんは言っているが、多様性とは

移民の人たちを指すらしい。排斥しているトランプさん自身が移民。きっぱり移民！ その昔、アメリカ映画で「インディアナ」と言われていた「ネイティブアメリカン」以外、アメリカ人はみんな移民。多数派の英国系を「主流」とするなら、トランプさんはドイツ系だから「反主流」。少数派。アンタ、他人を排斥できる立場なんかっていう話である。えらそうにしてんじゃない。もちろん、私ら日本人だって、何千年か何万年か知らないけど、さかのぼれば、あっちこっちから流入してきた移民らしい。そういえば、丸っこい縄文時代系あり、ほっそり涼しげな弥生時代系あり、毛深い人、毛深くない人、いろいろだから、純血なんですよ、移民じゃないんですと言えたぎりではないけどね。

でも、言わせていただくわ。トランプさんなんて、じいさんが移民だったわけでしょ。ついこの間やんか！ 移民、大事にしたれやってことである。

でもね、トランプさんが大統領になってくれたお陰で、私はニッポンに大チャンス到来だと思っている。

戦後七十数年にして、やつとこさアメリカの呪縛から逃れられる。敗戦国ゆえの「弟分」扱いの同盟国。戦後、脱脂粉乳をもらったし、北朝鮮の脅威から守ってもらったり、東日本大震災で「トモダチ作戦」を展開してくれたたり、お世話になっっていると思えばこそその隷属だったが、

向こうが「自分の国は自分で守れ」と言い始めてくれたのだから、当たり前前に独立独歩でやっていこう。大国と肩なんか並べなくていい。沖縄から基地をなくして、沖縄の人たちに沖縄の空を取り戻してもらおう。翁長知事は、いまアメリカに行っていて、「トランプさんによって、よい方向に変化することを期待する」と話しているそうだが、この視点、グッドだ（トランプさんにも一つぐらい、いいところがあったということだ。「こんなヤツの言う通りにしなくてもいいんじゃないか」と日本人が思える初めての大統領。ヨッ、大統領！）

だというのは、安倍さんの情けない対応は、どうだろう。「理解していただく」「インフラの支援をさせていただく」。せんでええつちゅうねん。

オーストラリアの大統領は、電話対談一時間の予定を二十五分で切っちゃったらしい。安倍さんにも、それぐらいの気概を持つてほしいものだ。オタオタせずには、いいものはいいい、おかしいことはおかしいと、素人の大統領に言うてやらねば。

あ、最後にもうひとつ。うちの九十歳の母が「トランプさんて、目の周りが白くなっている何かに似ていると思ったら、マントヒヒだった」と真顔で言っていた。イジメ界禁断の容姿の悪口。うひひ。この親にして、この娘あり。

（AO）

孫ウオツチング（14）

福田 圭

二〇一七年一月二十三日（月）、鳥取県に大雪が降った。その日、私は「孫ウオツチング」で鳥取にいた。天気予報で雪が降ることは分かっていたが、いつもスキーに行つて雪道になれていると自負している私としては、たかをくくって強行した。

道路の轍をそれ、雪が積もっているところに入ってしまうと冬用タイヤでも空回りして車が動かなくなる。気が動転する。雪の降りしきる中、自らの肝っ玉の小ささを自覚する。夜中だったら、山だったら遭難しているだろう。近くに通りがかった人に来てもらつて、二人がかりで車を押ししてもらつて何とか脱出する。

雪国では一人では生きられない。他人に助けられて生きていける。ありがたい。

息子から三日前にパソコンの電子メールで今鳥取に来るのはやめた方がよいと送信していたという。ところが、その電子メールのパスワードが古いものであったようで、連絡が届かなかったのだ。怖い目をしたが何となく息子の家にたどり着いたが、息子夫婦は出迎える用意がなく、光ちゃん保育園に行つていて、三時半にならないと帰つてこないという。仕方なしに、息子の車で近くの蕎麦屋へ昼食を食べに行つた。光君は、母親が「ドアを閉めて」というと、言葉を理解する

のかドアを閉めてくれるようになったという。食べ終わって駐車場から出ようとすると、今度は息子の車が空回りする。私が押しても動かない。ギヤをバックに入れて、前から車を押してようやく脱出できた。雪が降りしきる。「やばい」。私はとっさにそう思って、「孫ウオッチング」をとりやめて、宿に直行することにした。

二十三日夜から二十四日朝にかけて鳥取県は大雪に見舞われた。鳥取県南部の智頭町では、積雪が一月の観測史上最大の一一センチメートルを記録した。鳥取市も五〇センチメートルを超えた。山間部を中心に車の立ち往生が相次ぎ、二十四日朝までに三〇〇台以上が身動きできなくなった。子どもや老人で病院に運ばれる人も出た。平井伸治知事は二十三日午前四時一〇分、自衛隊に災害派遣を要請した。

翌二十四日朝宿のテレビをつけると大阪へ帰る鳥取自動車道が一部通行止めになり、迂回路の国道の立ち往生が続いているという。まだ雪が降っている。

もう一度「やばい」。次の二十五日には雪がやむという天気予報であったので、鳥取の宿に急遽もう一泊することにした。次の朝、車に積もった五〇センチメートルほどの雪を、汗をかきかき取り除き、車の周りの雪掻きをして、ようやく大阪へ向かったが、鳥取自動車道の智頭町付近は通行止めで、立ち往生のあった国道

三七三号、五三号線に迂回したが、スキーで雪道になれているはずの私が恐怖を感じた。道はデコボコ、スリップする、車の底を雪で擦る。圧雪車でならし、整備してあるスキー場付近の道路とはわけが違った。スキー場でグレンデから外れて、アイスバーンや新雪が入り混じった「不整地滑降」をしている感覚であった。夜に雪の中を走ったら立ち往生して当然だと思った。

何とか家にたどり着いて新聞を見ると、鳥取、岡山両県で最大六〇〇台以上が身動きできなくなったという。立ち往生が解消されたのは二十四日夕方であった。もう一泊していなければ、その立ち往生の中に私も確実に入っていたに違いない。大自然の前には人間はちっぽけな存在にすぎないことを痛感した。

そんなこんなで、昨年秋の地震が少なはずの鳥取地震に続き、今回も孫の顔を見ないままの「孫ウオッチング」となった次第である。



大人の今昔物語(30)

石川 吾郎

今回は怖いお話を取りあげてみます。前回に引き続き陰陽師が登場します。教科書に出ない度は、四／五。

悪霊となった人の妻の害を取り除いた陰陽師の話し(今昔物語巻二四・二十)

今は昔、某という者がいた。長年連れ添った妻を離縁してしまった。その妻は深く恨んで嘆き悲しんでいるうちに、悲しみのあまり伏せて病みつき、一月あまりで亡くなってしまった。

その女は、両親も親しくする者もなかったもので、その遺体を葬ってくれる者もなく、家の中に放置されていたが、髪の毛も落ちることなくそのままに着いていた。またその骨はバラバラになることなく全部つながっていた。細い隙間からこの有りさまを覗いていた隣りの住人は、ひどく恐怖に捕らえられた。またこの家の中が青く光るということがあった。のみならずしばしば家鳴りといったこともあったので、隣人はひどく恐れた。

やがてこの男、この噂を聞いて、なかば死を覚悟するほど恐怖を感じて「どうにかしてこの悪霊の難を逃れることができないものか。自分を恨んで亡くなった女ゆえに、必ず自分をとり殺されるだろ

う」と考えた。某という陰陽師のもとに出掛け、事情を説明し、この難を逃れる方法がないのかを訊ねると、陰陽師の言うには「これは、ひどく難しいことです。そうではありますが、せつかく私に相談をいただきましたので、何とか工夫をして見ましよう。ただしそのためには、恐ろしい目に遭うこともありますので、その点覚悟が必要です」と。夕暮れになって、その陰陽師は例の死人のいる家に、この男を連れて出向いた。

男、外で中の様子に聞き耳を立てているだけでも、髪の毛が太るほどの恐怖を感じているのに、ましてその家に入るのは言葉にできないほど怖かったが、すべてこの陰陽師を信用して出掛けた。

見ると、話しに違わず死人の髪の毛は落ちず、また骨はバラバラにならずにつながって横たわっていた。陰陽師は男を、その遺骸の上に馬乗りに乗らせ、その髪の毛を強く引っ張らせ「ゆめゆめお放しなさるな」と指示して、居住まいを正し何か呪文を唱え、「私がまたここに来るまで、このままでおりなさい。さぞかし怖いこともあるでしょうが、それを念じていなさい」と言い置いて、陰陽師は出ていった。

男はどうしようもなく、生きた心地もせず、言われたように死人に馬乗りになり、その髪の毛をしっかりとつかんだま

までいた。やがて夜になった。「真夜中になつてきたころ」と思っていると、この死人「ああ重いことだ」と言う、起きあがつて「よし、あいつを探してこよう」と言つて走りだした。何処とはわからぬ遠くまで行つた。それでも男は陰陽師に教えられた通りに、髪の毛をしっかりとぎつていたのだつた。やがて死人は引き返してきた。元の家に戻り同じように横たわつた。男は恐ろしいどころの話ではなかつた。気も動転していたが、南無三と念じ、髪の毛は放さず死人の背に乗つたままでいた。やがて暁の鶏が鳴いて、死人はすっかり動かなくなつた。

そうするうちにすっかり夜が明けたので、陰陽師がやつてきて「昨夜は定めし恐ろしいことがあつたことでしょう。髪の毛は放しませんでしたかな」と問うと、男はしっかりと握つていたと答える。その時、陰陽師はまた死人に呪文をとねえ、居住まいを正した後「もうこれでよい。帰りましょう」と、男を連れて家に戻つた。陰陽師の言うには「今はもう恐れることはありません。これもご依頼を無碍にお断りできなかったからです」と言う。男は泣く泣く陰陽師を拝んだ。その後この男は何事もなく、長年無事であるということだ。

これは近頃の話だろう。この男の孫

は今健在である。またこの陰陽師の孫も大宿直^{おとどち}というところに現在勤務をしていることだと伝えられているという。

《コメント》

なかなか迫力のある怪奇譚です。しかし陰陽師のやつたこととは女の霊によつて男が祟り殺されるのを防止した、ということでしょうが、いったい何をやつたのか今ひとつハッキリしないような気がします。ともあれ、陰陽師は道義的にはどうかと思われる男のエゴを肯定する立場に立っていると言えそうです。

また京の都に人の遺骸が放置されたままになつてゐるありさまは、現代の我々にはなかなか想像しづらいことですが、かつては京の町角や鴨の川原（都ではないが）などに死骸があるのは、珍しいことではなかつたようです。



B級サラリーマン渡世譚（43）

明石 幸次郎

明石はS沢の後をついて行くと、小さな会議室に通された。そこは、ロの字型に机が配置されて、その一角には移動式の白板が置かれてあり、社内の会議室として十人位集めて、打ち合わせするような部屋であつた。

部屋には既にS沢が招集をかけてくれた関係者が五人程いた。その五人が一斉に明石に顔を向けた。指示された席に着くと、S沢が打ち合わせの主旨を再確認の為に伝え、関係者に何か問題があればこの場で発言して欲しいと言つたあと、明石を指名して発言を求めた。

「この度、転勤で昨日、堺工場の資材課から、輸出第二部に異動して来ました明石と言います。M居さんの後任として韓国を担当することとなりました。お忙しい中、急に集まつて頂きましたのは、韓国向けCKDの件で、午前中にM商事と話し合い、納期の短縮を韓国側が希望しているならば、窓口商社の責任として、オーダーを出して貰わないと、CKD部品の手配に入ることが出来ない。納期が遅れれば、韓国側が商機を失う事になり、売上額が大幅に落ちることも考えられる、と言う事を強調して伝えると、腹を括つてくれて、オーダーを出して貰いました。明日、早々に製作通知を発行しますので、無理を承知でお願いしますが、七月末の

船積み間に合う様に、対応して頂くようお願いします。」と自己紹介を兼ねて、直近の状況説明を行つた。

これに対して、五人の中の年長者と思われる人が話を切り出した。「物流課のK定です。明石さん、わざわざ工場まで来て貰いありがとうございます。今回は、ウチの工場長が既に納期四十五日を受けてしまったので、その時から、ここにおる資材のM本が内々、手配してくれて進んでいる。まあ、遅くとも七月二十日までに部品が全部入つてくると、何とか月末の船積み間に合う様に頑張るよ。なあ、Mちゃん、大丈夫やなあ。明石さんが昼からこちらに来ることは、共同倉庫のK上さんから、連絡があり、横浜港からの八月一日出港のコンテナ船を予約したということ、こちらからの納入スケジュールを連絡してほしいと頼まれた。この人は、仕事でテキパキして早いわ。まあ、我々も一旦、受けたんやから、文句言わず、全力で対応せんあかん。M本、部中ちゃんと入ってくるんやろなあ？」

M本は、ぼさぼさ頭を掻きながら「問題ある会社が三社程あるが、後は、大丈夫です。この打ち合わせが終わり次第、三社に出向いて納期を確認して来ます。ところで、ギリギリとなると、いつまで許して貰えますか？K定さん？」とにっこり笑つて黄色い歯をみせた。

「二十五日がギリギリや。一日平均五本のコンテナに部品を詰めて行く予定を、部品が入り次第段取りして、計画を立て

ている。総数が約二〇本と見積もっている。二十日から二十六日位までは、夜勤もして二交代で頑張るつもりや！」と、歯切れよく答えた。

明石には、K定さんの様な、主体的に自分の仕事に責任を持って進めていくようなタイプの人を工場で、初めて出会った。この前までいた堺工場は数ある工場の中で一番古く、マザー工場と自負しているが、会議では全ての意思決定が合議制で議論を尽くすため、時間がかかり、それぞれの役割分担と自分の責任がはっきりしている。K定さんの様な、自らが最終責任を持ってやろうと言って、関係者を目標に向かい導いて行こうと言う会議のスタイルにはならない。

又、今回の様な営業が持ち込んだ非常業務を理解して、直ぐに行動してくれるような内容を会議で取り決めるのはまず困難で、そもそも営業がなぜ短納期で受けたかを問われる。それを、理解させるには、会議の前に生産の窓口である工務課に根回しをして、理解して貰わないと会議での話が進まないようなところがあった。要は、営業が頭を下げて、工場がそれを納得すれば、作ってやる、と言う意識が脈々と残っていた。

それに比較して、今日のこの会議は、何と前向きで、一旦受けた納期は何が何でも守らないといけないと言う、責任と当事者意識が関係者全員に感じられた。

単純な明石は、この工場であれば、頑張って注文を取って来たら、喜んで対応

してくれる気がして、これから、頑張るぞという、気持ちにさせられた。

S沢が「検査のY田さん、輸出品であるので、検査N数を増やして、チェックシートを作り、対応をお願いしますね」と発言すると、「もう、既に発注書が仮オーダーで出ている会社には、出向いて、過去に問題があった部品は特に念をいれてやっています。問題の無かった部品は、物流課に納品された時に、抜き取りでチェックします。これは、当然、社内検査規格に準じてやりますが、営業さんに迷惑かけるといけないので、検査数量は増やしてクレームが出ない様に万全を期します。ちゃんとやります」と規則以上の事をやって仕事を全うしようと言う発言を聞いて、明石は感心すると同時に安心した。仮に問題が出ても、ここまで、短納期に関わらず対応してもらえば、あとは、営業で何とか対応してやろうと思わせる会議の雰囲気があるにはあった。

最後にS沢が「他に何か問題等があれば、この場で言っておきたい」と出席者に発言を求めたのでK定が「明石さん。今回は何とか輸出部さんの顔を潰さずに対応するが、大体、営業さんは納期を客先にどのように説明しているの？もう最低でも一週間ほど余裕があれば、夜勤はやらずに済んでいるし、バタバタと仕事をやれば、何か問題が出てくるもんなんや？」と、問い詰める口調ではなく、やさしい口調で質問した。

オクラの山たより(5)

因生

「春はあけぼの。やうやうしろくなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる」で始まる「枕草子」の作者清少納言。この清少納言の兄弟にまつわる有名な話がある。清少納言の兄である清原致信の名前が藤原道長の日記「御堂関白記」に登場するのである。それも七、八騎の騎馬武者と十名ほどの歩兵に襲われ自宅で殺害されたというもの。事件のあらましは以下の通りである。

寛仁元年（一〇一七）三月八日のことである。事件は即位したばかりの後一条天皇の行幸で賑わう京で、それも六角富小路というから文字通りの京のど真ん中であつた。襲つたのは大江山の酒吞童子退治で有名な源頼光の弟である源頼親の配下である。また、殺された清原致信は藤原道長の家司（有力な貴族の家政などを司つた）であつた藤原保昌の郎党（部下）であつた。当時、大和国に勢力を伸ばしつつあつた源頼親と大和守であつた藤原保昌とが大和国の利権をめぐる衝突し、保昌の手先として清原致信が現地で威を誇る頼親の郎党である当麻為頼の暗殺に関与したらしい。致信が襲撃されたのはその報復である。殺された致信の年齢は推定だが五十代半ば、元の太宰少監（太宰府の四等官）であり、位階はおそらく正六位上であつたろう。要するに

貴族と庶民の境でギリギリからうじて貴族といったところか。清少納言の兄であるが、その低い地位によるものか、ずいぶんと危ない仕事をしていらしたらしい。源頼親はかなり危険な人物として当時でも有名だったらしく藤原道長も致信殺害の記事の直後に「人々広く云ふ、件の頼親は殺人の上手なり」とわざわざ記している。こんな危ない人を敵にまわして危険きわまる仕事をしたことからみれば、ひよつとしたら清少納言の兄は腕に覚えのある人物であつたかもしれない。そういえば清少納言の夫である橘則光も盗賊三、四人をたちまちのうちに切り殺したという話を「今昔物語」（陸奥前司橘則光、人を切り殺す語巻二十三 第十五）が伝えているから「枕草子」からはうかがいしれない世界を清少納言は持っているかもしれない。

蛇足ながら、この致信殺害の時、五十二歳になっていたと推定される清少納言が現場に居合わせ、とんでもない行動に出たという話が鎌倉時代初めに成立した「古事談」にあるが、それはいづれ紹介するとして、今ははぶくこととする。

さて、筆者が今回述べたいのは殺害事件という血なまぐさい話ではなく、実は平安京の住居、それも豪華な摂関家の住宅ではなく、庶民クラスの住戸についてである。先ほど述べた清原致信の住宅についていえば、「御堂関白記」には「六

角小路と富小路にはべる小宅に清原致信と云ふ者はべりけり」とあり六角富小路の「小宅」であったことがわかる。ややこしいことをいうが、この「小宅」という語はくせものである。小さな家のことだとするとんでもない思い違いをする。たとえば、天元五年（九八二）に慶滋保胤は五十歳をこえてやつと六条の北に自分の住居を手に入れた。この邸宅を保胤は「小宅」といつている。「小宅」といつても敷地の広さは二分の一町から四分の一町、つまりおよそ二千坪から一千坪ほどあり小さな家のイメージからはほど遠い。専門家によると「小宅」とは一町四方（四三〇〇坪）以上はあった撰関・大臣クラスの貴族の大邸宅と比較して、その小規模性を強調した表現であつたらしい。だから、清原致信の屋敷もかなりの広さのある「小宅」であつたはずである。

では、庶民の住居はどうなつていたのか。それも紫式部や清少納言が生きていた平安京に生きていた庶民の住居はどうであつたか。

先にも述べたように平安京に生きていた庶民のほとんどは朝廷に召し使われたり、貴族に仕えたりして、その下働きをしていた人々である。貴族たちに運営されてきた朝廷は数多くの庶民を職人や下働きの下部などとして使つていて、そうした庶民たちを大内裏付近の宿舎に住まわせていた。また、有力な貴族も、例え

ば右大臣であつた藤原実資には一〇〇人以上の雑色（下働きをする人たち）がい

たらしい。どんな仕事をしていたかは正確には分らないが、「宇津保物語」という物語の中に当時の家政組織が書かれていて参考になる。そこにはざつと以下の通りの部署があつた。やや煩雑になるが、あげてみる。

まず「大炊殿」。これは邸宅全体の人に向けての調理の担当。精米も行つてた。次に「御炊」。これは邸宅のご主人とその家族の調理を担当。「御厨子所」。ここも台所。「酒殿」。これは酒をつくるところ。酢や味噌、漬け物などもつくつていた。「贅殿」。ここでは漁師たちや猟師たちがその日の分の鳥や魚を献上するのを受け取つていた。さらにはその鳥や魚の料理もしていた。「織物所」。言うまでもなくいろいろな種類の布地が織られていた部署。「染殿」。ここは染色の場である。草木からさまざまな染料を煮出して作業をした。「打物所」。布地を「碓」でうつて光沢を出したり、その布地を広げたり巻いたりしていた。

最後に「張物所」。衣裳の洗い張りをする部署である。この他にも主人とその家族を世話する樋洗、下衆や牛車の牛を扱う「牛飼童」がいた。以上、細かい話になつたが、貴族には、その生活を支えるために多くの雑色と呼ばれた下働きの従者が必要であつたのである。

この多くの雑色たちのほとんどを貴族

たちは自分の邸宅の周辺に住まわせていた。先ほど名前を出した藤原実資の邸宅は小野宮第といわれる一町屋（一二〇メートル四方の大邸宅）であつたが、その東、南、西には庶民たちの小さな家がビッシリと建つていたらしいことが記録に見える。万寿二年（一二二五）七月二十八日、「夜半ばかりに南町の小人の宅な

ど焼亡す」と実資の日記「小右記」にある。「南町」とは小野宮第の南側の居住区であり、「小人」とは、もちろん取るに足らぬつまらない人つまり庶民のことである。また寛仁三年（一一一九）四月十三日の記事に「此の東町の小人の宅の放火は、帥中納言家の……者の見付くて告ぐれば……」とある。帥中納言とは清少納言が使えた中宮定子の弟である藤原隆家のこと。この記事によれば実資の東側にも庶民の家がひしめいていたろう。そして、その庶民の多くは実資の小野宮第で働く人々だったにちがいない。

それでは実資の日記に「小人の宅」といわれた庶民の旧居はどれほどの大きさであつたろうか。

それについて参考となるおもしろい史料がある。それは陰陽寮で下働きをしていた二十二人の宿舎が新造された際の「続日本後紀」に残された記録である。

承和五年（八三八）七月のことであつた。この二十二人の住居のために朝廷が用意した土地は「長さ二十四丈、広さ四丈」、一丈はざつと三メートルだから、敷

地面積は九百平方メートル弱である。ただし、ここから通路や共同のトイレや作業所に必要な面積を差し引くと実際に建てられた家屋の床面積は二十平方メートル、つまり畳でいへば十一枚ほどの広さではなかつたろうか。おそらく、これが当時の庶民の家の標準の大きさであつたろう。

この数字についての傍証ならば貴族の日記から容易に出すことができる。たとえば長元元年（一一二八）十月に都の東北部、藤原道長の邸宅である土御門邸の近くで火災が起きた。源経頼という貴族の日記「左経記」によると火災によつて二町（南北二四〇メートル、東西一二〇メートル）ほど範囲で「大小宅」が五百を超える数が焼失したという。土御門邸の近くといへば上級貴族の邸宅が立ち並ぶ地域であつたので、「大宅」とはおそらく一町屋（一二〇メートル四方の家）だつたはず。だとすれば残り一二〇メートル四方の空間に五〇〇軒以上の「小宅」がひしめいて建つていたことだろう。一軒の敷地は通路等の共用部分を差し引けば、二十平方メートルほどになる。

さらに、このような庶民の小さな家については次のような話もある。「今昔物語」巻二十六第四の「藤原明衡朝臣の若き時に女のもとに行きける語」である。藤原明衡は学者として知られた中級貴族だが、その明衡は若い頃、ある上級貴族（撰関家など）に女房として仕える中流貴族層の女性と恋仲になつた。当時、女

房は主家の邸宅に住み込んでいたので、明衡はこの愛しい人と愛し合うことが思うようにできない。困った明衡は女性が住込みで働く邸宅の近隣に住む庶民の住居を使うという妙案を考えついた。「今昔物語」によると、この時に明衡が一晩だけ間借りしようとした家は甲斐守藤原公業家に雑色として仕える庶民男性とその妻とが住む家だったらしい。明衡がその家に行くと「家主の男」である公業家の雑色は帰宅しておらず、その妻だけがいた。その妻は明衡からの要請を「いとたやすいこと」と、その夫に相談することもなく快諾した。ここで住居の使用に関する判断の権限を妻が持っているのはおもしろいが、そこには触れず先を急ごう。

さて、恋人と楽しい一夜を過ごすはずだった明衡は部屋に入るや、その予想以上の狭さに「わつ、狭。」とびっくり仰天することとなる。原文によれば「狭き小屋なれば、己が臥す所より外に臥すべき所も無かりければ」と書かれているから、その本来の住人である庶民の夫婦が寝そべる場所以外に人間が横になる場所など全くなかったようである。「今昔物語」の表現に多少の誇張があったとしても、この部屋の床面積は昔の学生下宿並みの四畳半の部屋よりも少し広いぐらいだったかもしれない。

ここで一つ疑問が出てくる。もし、主人が政治的に失脚したり、左遷されたり

して土佐守にでもなつて地方へと行ったら、こうした雑色たちはどうしたろうか。

当然のことだが、宅地の私的所有権の強固な存在は、当時の土地売買の証書（売券という）が多く現存していることから明らかである。しかし、古代史の専門家によると所有権を残したまま主人が不在になり家屋が荒廃し倒壊した場合、平安京の庶民がそこに小屋を建てて集住し、勝手に耕地化するなど、占有・用益することは一概に排除されていなかったという。もちろん、先に述べた売券といった正式の証文をもった所有者が現れて既に居住している小屋の所有者たちと利害が衝突することはたびたびあった。小屋の所有者たちにも前住者としての権利主張があったらしいし、かなりの抵抗もあったらしいのだが、文書の持つ力には屈せざるをえず、他所に「徒なる地」をさがし「許されをこうむりて」移住していくしかなかった。このようなことが何度も繰り返されて十世紀後半は「東京（左京）四条北、…人々貴賤となく、多く群聚する所なり。高き家は門を並べ堂を連ね、小さき家は壁を隔て軒を列ぬ」（「池亭記」慶滋保胤）というありさまとなった。文字通り「小家だらけの平安京」になっていったのである。そして、この時期になると集住する庶民の中で一定の社会集団ができてくる。それについては既に紙数も尽きたので、いずれまたの機会にということに。

我がおくのほそ道の旅(2)

成瀬 和之

昨秋、山の紅葉を追い求めて東北地方を旅し、「立石寺」（山寺と通称される）に行った。前回書いたように、そこで芭蕉に出会い、そこから芭蕉の「おくのほそ道」の後半部分に添って旅をすることとなった。

「山形領内に立石寺という山寺がある。慈覚大使のお開きになった寺で、格別静閑の地である。一度行ってみるがよいと人々が勧めるので、尾花沢から予定とは逆方向に引き返し、立石寺に向かったが、その間七里（徒歩で二十八キロ！成瀬注）ばかりであった。着いた時には、日もまだ暮れていない。そこで麓の宿坊に宿をとっておいで、山上の僧堂に登る。岩に巨岩を重ねて山としたような地形で、松や柏も年数を経、土や石も時代がついて苔がなめらかに蔽い、岩上に建てられた多くの支院はみな扉をしめきって、物音一つ聞こえない。がけのふちをめぐり、

岩の上を這ったりして、仏殿を拝めば、四辺の美しい景色はただひっそりと静まりかえって、自分の心の澄みきってゆくだけの感ぜられた。

閑かさや岩にしみ入る蟬の声

——何という静けさ。ふと気がつけば、この静寂の中で蟬の鳴き声のするのが、あたかも四囲の苔むした岩石の中へとし

み透ってゆくような気がする。あたりの静寂はいっそう深く、自分の心も澄みきって、自然の生命の中へと融けこんでゆくかのようだ。」（『新版おくのほそ道』角川ソフィア文庫 現代語訳）

芭蕉が山寺に着いたのは夏の午後だが、私が立石寺に行ったのは昨年の十月十日頃であった。東北の紅葉はもう始まっている。八甲田山は真つ盛りであったが、立石寺は始まったばかりであった。岩上の納経堂を眺める絶好の位置にある一本だけが紅葉していた。

「山寺に芭蕉をしのぶ紅葉かな」六十歳にして人生で初めて、恥ずかしながら俳句を詠んでみた。

さて、真打登場、芭蕉の句「閑かさや岩にしみ入る蟬の声」である。岩にしみ入るように蟬が鳴いているのであれば、やかましいではないか。やかましいにもかかわらず芭蕉が「閑かさ」というのは、この「閑さ」が蟬の鳴きしきる現実の世界とは別次元の「閑さ」だからである。「閑さ」は心の中の「閑さ」なのだ。山寺は約一〇〇〇段の階段を登った山上にある。眼下には緑の大地がひろがり、頭上には大空が果てしなくひろがる。そこで蟬の声を聞いているうちに芭蕉は天地に満ちる「閑さ」を感じ取ったのだ。本文は「四辺の美しい景色はただひっそりと静まりかえって、自分の心の澄みきってゆくのだけが感ぜられた。」と結ばれている。その直後に「閑かさや岩にしみ入

る蟬の声」である。この散文と韻文の切り替え、この対比の妙。突然、蟬の鳴きしきる現実の向こうから宇宙が姿を現す。

「古池や蛙飛びこむ水のおと」の句は、誰もが知っている芭蕉の代表句である。

だが芭蕉が住んでいた江戸深川の芭蕉庵には「古池」など無かった。「蛙飛びこむ水のおと」という現実の音を聞いて、芭蕉は心の中に「古池」を思い浮べたのだ。

現実と心の世界という次元の異なるものの合わさった〈現実+心〉の句が「蕉風」である。それまで他愛ない言葉遊びでし

かなかった俳句にはじめて心の世界を開いた「蕉風開眼の句」が「古池や」の句である。文芸を文学に高めた「蕉風」と

いわれる境地に到達した芭蕉が、江戸深川の芭蕉庵を引き払い背水の陣で、東北地方に旅に出て、推敲に推敲を重ねて書き上げたのが「おくのほそ道」という、

単なる旅行記にとどまらない〈現実+心の世界〉の「文学作品」である。随行した曾良の日記との食い違いが、そのことを示している。

「閑かさや岩にしみ入る蟬の声」に戻るが、「静観澄心の姿勢のもとに、自然の寂寥相へと深まったこの一句は、おそらく本紀行中での絶唱の一つに数えることができるだろう」と角川ソフィア文庫の訳注者は評する。私もそれに同意する。

老婆心ながら、還暦を過ぎて山寺への約一〇〇〇段の階段を登りきろうと思えば、日頃から、エスカレーターがあつて

もできるだけ階段を登るなど、トレーニングをしておくことをお勧めする。

「くりかえし時間をかけて考えれば考えるほど、いつも新たに、ますます強い

感嘆と畏敬で心を満たすものが二つある。わが上なる星空と、わが内なる道徳法則である。」これは、カントの「実践理性批判」の「結び」の冒頭部分である。「おく

のほそ道」の後半からは、この言葉を思い起こさせる宇宙観と人生観が順次展開していくことになる。

「閑かさ」の句を出発点として宇宙めぐるの旅が始まった。旅は月、太陽、さらに銀河へと向かう。

【訂正】前回「月日は百代の過客にして、生きたる年もまた旅人なり。」の傍線部分は「行きかふ」の間違いでした。

参考図書：NHKテキスト「おくのほそ道」（長谷川權）



米国紀行（3）

河原林 成行

米国の土を踏む Aug. 31,

藤田 様、 米国紀行・第三話をお届けします。

第三話では、我々が三泊した「ザ・コンフォート・イン（The Comfort Inn）」周辺の環境について記します。話は変わりますが、昨日（八月三十日〔土〕）、大評判のあの「もののけ姫」を子供三人と見してきました。子供らは二回目です。美しいアニメの映像に魅せられてしまいました。けどやっぱり、私としては、「失楽園」の方がよいのですが。

米国東部時間で五月一日（木）十九時五〇分、ようやくネディーンが予約してくれているハズの「ザ・コンフォート・イン」に着きました。日没過ぎで、すっかり辺りも暗くなっていました。ホッと一息つく前に先ずチェックインをしなければなりません。二個の大きな荷物を持つてフロントへ行くと、十七〜二十才位と思われる二人の黒人女性と一人の白人男性がテキパキと電話応対等の受け付け業務を忙しそうにこなしています。私はきつと、「よくいらつしやいました。お待ちしております。」と挨拶しました。部屋はこちらです。ご案内します。」という定型的な応対が待っているものと思っていました。

処が、応対してくれるまでだいぶ待た

され、やっと応対してくれた若い黒人女性には、こちらの言うことを聞こうともせず、機関銃のように全く聞き取れない英語をまくしたてます。私は我々の氏名と予約をして来た（予約済みである）ことを告げるのですが通じません。もうお互いが喧嘩でもしているように言い合いです。ネディーンによると、「ネディーンの結婚式に来たとフロントで言ってもらえばよい。予約はおきました。」とのことだったので。彼女自身もこのホテルに來ているハズで、「着いたら、フロントから呼び出して下さい。」とのことだったので。こちらは、それを忠実に実行しているだけなのです。

その時はフロントの黒人女性たちが何を言っていたのか分かりません。長旅の疲れと空腹と聞き取れない英語にこちらもイライラしています。

そのうちようやく、気が進まないしできたら関わりたくない様子の他の二人が助けに入ってくれます。私は早くこの場を收拾したいので「作戦」を変更し、「少ないが三人で分けてくれ」と言つて、白人男性にチップを三ドル渡しました。最初は、「いいですよ」と言つて一応遠慮していたのですが、「本当に？」と言つて札を引つ込めようとすると、すんなり納めてくれました。彼らにとつて一ドルは大きいのです（誰にとつても大きいですが）。何しろ喫茶店でコーヒーが一杯飲めるのですから。

そこで、「我々は典型的な日本人だ。英語はうまくない。子供にしゃべるようにユックリしゃべってくれ。」と言うと、今までの辺りに立ち込めていた緊張感が嘘のように晴れ、その白人男性は、何か書類を探し、「三泊、一ベッドで予約したことだけを確認すると、愛想よく荷物を持って部屋(三二二号室、三階の一番端)へ案内してくれました。途中、満開の桜のような大木がライトアップされており非常に印象的でした。

真っ白い花を咲かせた「花みずき」なのですが、それは何とも鮮やかなものでした。最初は「桜かな？」と思っていたのですが、妻が「チョット違うよ。『花みずき』じゃない?」と言います。結局、メリーランド州の州花の「花みずき」(Dogwood)であることが分かりました。

一体、何が起こったのかサッパリ分からないまま、やっと部屋に到着くと、もう八時半を回っています。デトロイトからボルチモア・ワシントン国際(BWI)空港への機内食以外何も食べていないことに気づき、「チョット食事にでも行こう」ということで、何処で食事できるのかを聞きに、気は進まないのですが、またホテルのフロントへ行きました。

受付嬢は一人が交代していました。受付嬢達もチョット応対に慣れたのか、このホテルに隣接している、日本の「スカイラーク (Sky Lark)」のようなファミリーレストランを教えてくださいました。とい

うよりも、大きな道路沿いのこの辺りに、そこしか他にレストランらしきものはないのです。

チョットした芝生を越えてその店へ行くと、閉店時間の九時前でガラッと空いた店内では、「もう客は来ない」と思っていたのか、女性店員が店内の掃除や片付けをしています。「今からでもOKか?」と聞くと、快く「OKよ」と応えてくれたので、出されたメニューから出来るだけアッサリしたもの(イタリアン)を注文し、何とか一息いれることができました。

この店には、次の日もお世話になることになりました(なにしろ、ここしかありませんので)。その時は午後七時過ぎで、時間帯もよく客で一杯でした。特に黒人が多く、十人足らずの黒人ファミリーのパーティーもありました。母親の誕生日だったのか、でっぴりとした彼女を中心に、団欒のひとときを楽しんでいました。同じような光景をワシントンDCやニューヨークでもよく目にしました。こういうシーンをみると、ジャズやソウルを実感します。そういう雰囲気やイメージにピッタリなのです。

ネディーンの披露宴でのダンスタイムの一曲目が最近亡くなったあのサミー・デービス・Jrの(??)、有名な、私も大好きなソウル調のバラード曲「What a Wonderful World!」だったのもうなづけるような気がします。ネディーンが意識

して選んだ訳ではないと思いますが……。まだまだ国全体ではないでしょうが、長い年月と多くの犠牲を要している国になつてきました。傍目ながら、ホッと安心します。単一民族の我々にはまだまだ分からない深層があるとは思いますが……。この国のフトコロの深さや度量の大きさの一面かも知れませんが、「みんなそうやってきた」という歴史が今現在も出来つつあるのかも知れません。

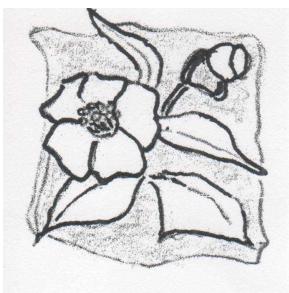
ちなみに、ご存知のようにこの地区を始めワシントンDC近郊では、第十六代大統領のリンカーン(A. Lincoln)の黒人保護政策を継いでいる所が多いので、黒人系の住民が多いのです。

とは言っても、現実問題として当時はまだまだ外国人に慣れてない我々日本人にとつて、直接彼らに出会うだけでも大変な時代でした。「ザ・コンフォート・イン(The Comfort Inn)」で真夜中の二時頃、コーラを買つての帰りに、何処からともなく現れて付いて来る彼らに、生理的にいい気持ちじゃなかったというかゾッとしたのも事実です。こんな時間帯なら日本でも同じ気持ちになるって? それはともかく……一かければいいんでしょね、キット。肩の力を抜いて、軽くなる調子で、「お早う(Morning)」とかネ。寝ぼけマナコでチョットそこまで気が回りませんでした。次回はやってみようと思います。

出張でドイツへ行つたときは、相手か

まわすバカの一つ覚えのようにやっていました。また、後から知ったのですが、「ザ・コンフォート・イン(The Comfort Inn)」での初日のトラブルは、若い受付嬢達が、「アッ、東洋人だ。日本人のようだね。どうしよう。」ということで大変緊張し、一種のパニック状態になり、こちらのことを聞く余裕もなくし、機関銃のような早口のしゃべり方になったようです。お互いが相手のことを考える余裕をなくし、やたら緊張ばかりしていたのです。また、それ程、ここへ日本人が来るのは希だったようでもあります。話がだいぶ横道へ外れました。元へ戻します。

五月一日(木)の到着の日には、この様に色々ありました。やはり、しゃべり方(アクセントやスピード)に慣れるまで時間がかかるようです。ネディーンの結婚式は、翌々日の五月三日(土)(現地時間)なので、今日はゆっくり寝て、明日は首都ワシントンへ行くことにしました。



ピクトグラムあれこれ

大江 雉鬼

「ユニバーサル・デザイン」なる言葉がよく聞くようになった。この言葉が意味するところは、デザインという語感から連想されやすい見た目の問題に限定されるものではなく、形状や仕様など広範に及ぶ。だが、このところたびたび耳にするのは、日本国内で普通に使われている案内用の視覚記号の中に外国人には理解しづらいものがあるため検討を云々という文脈である。日本国内の日本人向けであれば、歴史もあって定着もして何の問題もないのだが、日本を訪れる外国人観光客への配慮が足りないから修正するのが望ましいとのことらしい。ニュース等でたびたびやり玉に挙げられるのは温泉マークなのだが、JIS（日本工業規格）に定められ、日本人であれば知らない人がいないかのマークでもユニバーサル・デザインの観点からでは不適格なのだそうだ。他にも案内所を示す「？」を「i」に改める等の意見が紹介されている。

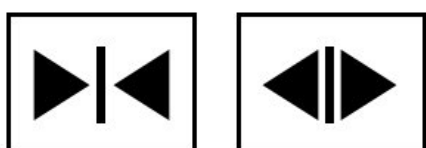
確かに、その手の案内表示も日本国内で日本人だけが目にする時代ではなくなったのは事実だし、一方にISO（国際標準化機構）の策定を受けて世界規模で通用しているものがあるのなら、そちらへ移行した方がいいという意見には一理も二理もあるところだが、わからないら

しい外国人が多い云々の現象面だけを強調して既存のものを捨て去ろうとする発想には首を傾げざるを得ない。二〇二〇年の東京オリンピックを迎えるにあたって、これまで以上に国際化を進めようとする立場からの提案なのだろうが、短期間の逗留とはいえ郷に入れば郷に従え、ある程度は日本的なものを理解し、日本的風習に合わせる努力はしてもらいたいとも思うわけである。

と、例によって例のごとく、屁の突っ張りにもならないご託から始めたが、温泉マークや案内所マークに限らず、実はこのところ、その手の図案記号（専門的にはピクトグラムという）をめぐるいくつか楽しい経験をしたものだから報告しておこう。

「開く／閉じる」

エレベータに乗ると、箱の内側には操作パネルがあり、目的階を示すボタンの上もしくは下に扉の開閉を指示するボタンがある。「開」「閉」



など文字が添えられていることもあるが、シンブルな操作パネルもある。そうした記号だけの場合、三角形の頂点を内側に向かい合わせせたものが「閉」で、その反対が「開」を意味することが多い。この三角形の組み合わせ

に対して、どちらが開でどちらが閉かを迷うことはたぶんだろう、と思っていた。だが、迷わないのは普通の精神状態でマークと向き合った時であり、瞬時にどちらかを選べと言われると、一瞬ながらも戸惑いが生じてしまう。それを実地で経験させてくれるのが、エレベーターに乗って扉が閉まろうとした、まさしくそのタイミングで駆け込んでくる人が目に入った時である。そのものすごい勢いに気圧されて思わずボタンを押してしまふ、三角形が内側に向き合っている方を。駆け込んでくる人とは、すでに目が合っているの、先方の意図は伝わっている。それに対する反応が「閉」の選択なのだから、驚きとも憎しみともつかない眼差しが向けられたのがわかる。慌ててボタンを押し直して扉を開きはするものの、目的階につくまでの数十秒間、非常にバツの悪い思いをさせていただいた。

「電話の発信／切断ボタン」

国際標準なのか日本だけなのか知らないが、受話器を斜めにデザインしたマークが発信であり、水平に描いているのが通話切断である。何の問題もなく、非常に明快なデザインだと思っていたが、近頃はそのモチーフが何なのかわからない子供もいるらしい。そう言われると気づくのだが携帯電話であれ、スマートフォンであれ、受話器なるものは付いていないのだから、意味がわからない子供が現れても不思議ではない。もちろん固定回

線用の電話機であれば受話器のあるタイプが主流だと思うが、アイコンのデザインに用いられているのは黒電話時代の受話器っぽい。近年の機種であれば受話器もスタイリッシュだし、もしかすると子供の形状しか知らない子供だっているかも知れない。そうすると、黒電話風のアイコンからは、その元になるモチーフがわからないというケースも起きてくる。

電話なるものは、大きさ、機能、形状すべてが一昔とは大きく変わっているのだから、アイコンも歩調を合わせてもよさそうなものだが、コロコロ変えるのは逆効果なのだろう。ちなみに、三十年ほど前の歌謡曲には「♪ダイヤル回して手を止めた〜」と歌うものもあったが、そうした歌詞は今の子供には理解できない古文に属することになる。

「緊急事態」

ピクトグラムがその効力を発揮するのは、会話や文字言語での意思疎通ができないケースであり、最たるものは何か緊急事態に直面した時のものだろう。たとえば急病時の医務室や事件事故に遭った時の警察官詰め所（交番）。その類いの案内マークには、それこそユニバーサル・デザインが求められる。しかし、それら以上に普遍的な需要があるのがトイレの所在を示すマークである。トイレマークといえ、通常は男性と女性をイメージさせるアイコンを並べたものである。男性アイコンと女性アイコンが並んでいる

と、そこがトイレであることは、たいいていの外国人にも伝わるし、車椅子マークが添えられていると障害者用トイレもありますという意味であることがわかってもらえる。いずれにせよ、そのマークが何を意味しているのかがわかりづらいというのがあつては困るのがトイレ案内である。幸いなことにピクトグラムによるトイレ案内は世界共通のようだが、問題が起きるとすればむしろ文字情報、つまり日本語によるトイレ表記の方だろう。

ありとあらゆる日本人に通じる「便所」「お手洗い」「WC」ならいいが、「雪隠」「東司」「手水」では扉を開けて中を覗くまでトイレだとわからない人がいるかも知れない。横文字では「RESTROOM」や「LAVATORY」が用を足す場所だとわからない人がいても不思議ではないし、それっぽい場所にあつて、それっぽい響きを醸している「PRIVATE」をそこ事思つてドアを開けてしまう人がいるかも知れない。遠回しに仄めかすのも大切だが、こういうところでもピクトグラムをうまく使っていれば安心できるはずである。



埋め草

京都の新京極に「かねよ」という鰻屋がある。シラスウナギの高騰がニュースになるご時世なので最近のご無沙汰……、という以前に、そんな話が取り沙汰される前からほとんど入ったことはなかった。とはいえ、皆無ではない。これはパチンコなどであぶく銭が入った時に贅沢をしたとかではなく、「かねよ」で鰻を食べねばならない必然的な理由が存在していたからである。

というのは、この店は二階大広間で月イチの寄席を開いていて、鰻井の料金と同額の木戸銭を設定しているのである。したがって寄席の日には、鰻井のお代で鰻井十落語三席が堪能できる仕組みになつていて、落語に鰻に付いてくるのか、鰻に落語が付いてくるのか区別のできないサービスを行っているのである。食材の高騰に歩調を合わせて木戸銭も二三〇〇円に値上げされたが、落語三席と鰻井の値段と考えれば十分に安い。

その「かねよ寄席」に数年ぶりに入つてみた。最近では、嘘かまことか、落語が若い人たちの間でもブームになつていて聞く。テレビが「××が人気」と繰り返すことで本当に火が付くということもあるのだ、その手の話題にはマユツバで臨むようにしているのだが、四く五十人も入ればいっぱいになる大広間には、グループでやってきたとおぼしき大学生を始め、若い人たちが少なからず見受けら

れた。落語ブームなるものはあながちのフェイクニュースではなさそうだが。

その日の演者は、桂りようば、桂歌之介、桂米二。演じられたのは「強情炎」「四段目」「茶の湯」の三題。時代背景などが理解できていないと面白さも半減しかねない演目も混じっていたが、仕草や表情で笑いを取るあたりは、さすがに話芸のプロである。とはいえ、歌之介が演じた「四段目」は、若い人たちにはとりわけ難しい部類だったようだ。そもそも丁稚なる存在がどういうものかわかっていないと話の世界に入れないし、落語の中で再現される忠臣蔵の舞台も、台詞が難しいことを含め、相応の知識がないとトンチンカンになりかねない。幸いなことに、こちらは塩冶判官だの力弥だの、あるいは由良助だのといった名前を聞けば、とりたてて説明されなくても人間関係はわかるのでシチュエーションの把握はできたが、展開について行けずにポカインとなった人もいたのではないかな。

ともあれ、落語なるものは筆録された台本では面白みは全く伝わらない。テレビやDVD等の映像媒体でも十分ではない。話芸が演じられる場の空気が笑いを呼び起こすのだろう。そういう意味では「かねよ」はナマの話芸を間近で見せてもらえる貴重な場所である。毎月は難しいにしても、余裕のある時はぜひ足を運びたいものである。

編集後記

あつと言う間に二月になった。二月は逃げ、三月は去るというから春も近い。トランプさんの話題でもちきりの一月だった。世界中の国がトランプさんの想いを考えあぐねている。

どちらにせよ、アメリカ国民が民主的に選んだ大統領が公約通りの事をやろうとしているのだからトヤカク言うのは内政干渉になつて失礼だと思う。

日本も次の選挙では、原発・戦争・格差を進めるのか止めるのか。どちらを国民は選択するのか。立候補者は明確に意思表示して国民の審判を仰ぐ。是非ともトランプさんから「日本は日本で好きにやれや」と言わせるような総理を持ちたい。戦後はじめて巡ってきたチャンスを一かせる政治家を選びたい。

(裏)

MEMO

無理をしない

年齢には、三種類あるといわれる。どうしようもないのが戸籍年齢、かなり個人差のあるのが肉体年齢、そして決定的なのは自覚年齢じゃないかと。

顔面のしわ、歩き方、どう頑張ろうと仕方がない。しかし、頭は使うほど少しずつ冴えてくる。

むずかしい本を読むことも、人生のたそがれに近い内容をえらぶ。意図的に本を読む努力などは明らかにボケを防止してくれるのではないかと。

「老人のずるさは、ボケて許される」

記憶力が衰えたとなげくよりも、若返りの特効薬はマンガの本。自分に思い当たることが、何気なく書き表してあり、アハツハハと笑ってしまふ。

ストレスも笑い飛ばせるようになったら人生観も変わってくるのではないか、とはいいいながらも、笑うにはせちがら過ぎる世の中かもしれない。

困ったなあ

どうして、こんなに身体のパランスがとれないのかと、ハツと我にかえる。そして一人つぶやく。耳にした孫娘が「おばあちゃん、もうその歳やから深かーく考えんでもいいや」と笑う。

ムリもないと自分に言い聞かせてはいるのだが。

外を歩いても正しく右側を歩いているのに向こうは左側を歩いて来て、「どっちが譲るのか」と、しばらくにらみあう。仕方がなく脇へよける。

改めて「くそっ」負けた。相手は男性。つまり何気なく過ごしている日常が全くおそろしいのだ。

自転車、車のタイヤもフツと涼しいというのか生暖かい空気を残して走り抜けてゆく。どちらも凶々しい。

体が動かないのは老化現象であり、言い分が通らないのも価値観の違いなのか。

「また一つ、どうにもならない年がふえ」

人と生まれたからには、みんな此のコースをたどるのだが。

毎日読んで

はじめは見出しだけ目を通してゆく。面白くもなく、理解も出来ないままページをめくる。新しいことを考えていると、頭は身体よりもゆっくりに年をとっていくのかなア。

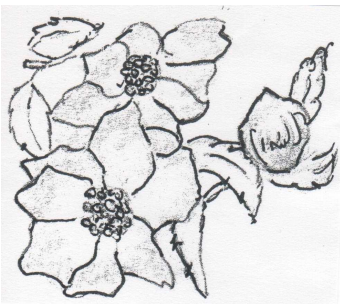
昨年は、百歳以上の高齢者は全国で六万五千人を超えたとのこと。

認知症の老人は、まだまだ増えてゆく。周りに面倒をかけるのではないかと。長生きを手放しで喜べなくなるのは悲しい。

健康寿命をのばす方法を一人ひとりが考えなくては…。

その状況を変えるヒントがあったら教えてほしい。

意志を努力で、新しい知識人が現れることを待つ。他人事のように考える自分にムチを打って新聞から目を離れた。



俳句

土田 裕

草青む土の疲れを癒やすごと

蟬梅や虚空に咲きて匂ひけり

朝寝して起こされぬことまた愁ひ

残雪の絵模様となる八ヶ岳

紅梅のつぼみのままに香りけり

影山武司

冬風のつぶやくやうに波寄する

虚子の墓探し迷うや寒椿

長谷川観音見上ぐる坂の寒の木瓜

(旧芝川町西山本山寺)

宿坊の跡を留めず枯野かな

息切らし参道登り寒桜

霜柱土くれ残し解けにけり

月冴ゆるキリコに似たる夜の街

地に落つる一滴重し寒の雨

天窓のまだ灰白し日脚伸ぶ

嬰兒の大きな欠伸春近し

春を待つしらす漁師の縄手入れ

手の中に君の手のあり春を待つ